



IUFRO-J NEWS

No. 95 (2008.11) —

第8回 IUFRO 国際ブナシンポジウムの開催

北海道立林業試験場 寺澤和彦

第8回 IUFRO 国際ブナシンポジウムが、北海道の南部、函館市からほど近い七飯町の大沼国際セミナーハウスを主会場として、2008年9月8日から13日までの6日間にわたって開催され、海外15か国から38名、日本から53名、合計91名の研究者や学生が参加した。

開催の経緯

シンポジウムを主催した IUFRO・Division1 の Working Party1.01.07 “Ecology and Silviculture of Beech” (ブナの生態と育林技術) は、10年ほど前までは主にヨーロッパブナの育種と育林に関する研究者達を中心となって活動していたグループで、ドイツ (1984)、スロベニア (1986)、スロバキア (1988)、スペイン (1992)、デンマーク (1994)、ウクライナ (1995) と、ヨーロッパの各地で6回のシンポジウムを開催してきた。2001年に、研究グループの活動の広域化を図るという意図のもとに役員全員の交替が行われ、コーディネーターに Palle Madsen 氏 (デンマーク)、副コーディネーターに Khosro Sagheb-Talebi 氏 (イラン) と私が就くことになった。2004年には、ヨーロッパ以外での初めてのシンポジウムとして、カスピ海南岸山地のオリエントブナ林へのエクスカージョンを含む第7回シンポジウムをイランの首都テヘランで開催した。2006年にはとくに育林技術に焦点を当てた研究集会をルーマニアのブラショフで開催している。日本でのシンポジウム開催も、研究グループの対象を世界のブナに拡大し、より広範な研究者の参画を促す流れの中で必然的に話題に

上ってきたもので、2006年のルーマニアでの研究集会以降に開催準備が具体化した。

シンポジウムの概要

シンポジウムは、3日間の研究発表 (基調講演・口頭発表・ポスター発表) と、それを挟む日帰りとお泊二日の2つのエクスカージョンで構成された。日程は、つぎのとおりである。

- ・9月8日: 受付・開会式・エクスカージョン (北限域のブナ林)・懇親会
- ・9月9日～11日: 研究発表 (大沼国際セミナーハウス)
- ・9月12日～13日: エクスカージョン (八甲田山・白神山地)

参加総数91名のうち、海外からの参加者数を国 (所属機関が所在する国) 別にみると、スウェーデン (8)、フランス (7)、イラン (5)、ドイツ (4)、オランダ (2)、スロベニア (2)、ルーマニア (2)、アイルランド (1)、イギリス (1)、イタリア (1)、コソボ (1)、スイス (1)、スペイン (1)、チェコ (1)、デンマーク (1) であり、ヨーロッパ勢が圧倒的に多い。ちなみに、世界のブナ属約10種の主な分布域は、ユーラシア西部 (ヨーロッパ中西部～バルカン半島～イラン北部)、東アジア (日本、中国南部) および北アメリカ東部である。したがって、今回のシンポジウムには、ユーラシア西部のブナ (*Fagus sylvatica* と *F. orientalis*) と日本のブナ (*F. crenata*) についてはその分布域から多くの参加者があったことにな

る。一方、中国のブナ (*F. longipetiolata*, *F. lucida*, *F. engleriana* など) と北アメリカのブナ (*F. glandifolia*) については、分布地域からの参加者はいなかったが、それらを対象とする発表はそれぞれ1件ずつ行われた。

開会・研究発表

シンポジウム初日の開会式とその後3日間の研究発表は、道南の景勝地・大沼国定公園内の大沼国際セミナーハウスで行われた。この会議施設は、「森と湖の会議場」のキャッチフレーズのとおり秀峰・駒ヶ岳を望む大沼湖畔の広葉樹林の中にあり、緑に囲まれた静かな環境は参加者にとっても好評であった (写真-1)。

開会式では、P. Madsen 氏が2001年以降の研究グループの活動の紹介を兼ねた主催者挨拶を行った後、北海道立林業試験場長の高藤満氏による歓迎挨拶、K. Talebi 氏による IUFRO 会長 D.K. Lee 氏のメッセージ紹介と進み、全体日程と日帰りエクスカージョンの概要説明の後、北限域のブナ林へのエクスカージョンに出発した。

研究発表では、1会場・全員参加による口頭セッションが11のテーマについて行われ、基調講演6件、一般講演35件が発表された (写真-2)。またポスターセッションでは26件のポスターが発表された (写真-3)。今回のシンポジウムのメインテーマはこの研究グループの名前のとおり「ブナの生態と育林技術」であるが、討

議の対象分野は幅広く設定し、空間軸としては遺伝子から個体・林分・景観・地域・大陸スケールまで、また時間軸としては最終氷期終了後の過去1万年程度から現在を経て気候変動の将来の予測範囲である100年程度先までを対象とした。口頭セッションの構成はつぎのとおりである。

- Session 1: ブナ個体群の動態—広い視点から—
(司会: K. Kramer)
- Session 2: 遺伝的多様性 (1) 地理的スケール
(司会: S. Oddou-Muratorio)
- Session 3: 遺伝的多様性 (2) 景観/林分スケール
(司会: G. von Wuehlich)
- Session 4: 更新プロセス (1) 景観/林分スケール
(司会: N. Nicolescu)
- Session 5: 更新プロセス (2) 成長・繁殖特性
(司会: P. Madsen)
- Session 6: 更新プロセス (3) 種多様性と管理
(司会: M. Löf)
- Session 7: ブナ林の管理 (1) 近自然型施業
(司会: A. Zingg)
- Session 8: ブナ林の管理 (2) 経済的視点
(司会: K. Talebi)
- Session 9: 生理・形態的特性 (司会: C. Collet)
- Session 10: 将来に向けて (1) (司会: P. Ballandier)
- Session 11: 将来に向けて (2) (司会: 中静 透)



写真-1 大沼国際セミナーハウスでの集合写真

プログラムに組まれたこれらの発表に加えて、直前にキャンセルされた2～3件の口頭発表の空き時間を利用して、日本のブナとアメリカブナの生態・施業や遺伝変異に関する発表をそれぞれ中静透氏（東北大学）と北村系子氏（森林総研北海道支所）にお願いした。直前の講演依頼にもかかわらず、両氏にはたくさんの綺麗なスライドを使った発表を手際よくまとめていただき、参加者はそれぞれの地域のブナに関する理解を大いに深めることができた。

基調講演

基調講演の内容の決定は、今回の準備作業の中でも、シンポジウム科学委員会が早い段階から力を入れて取り組んだもののひとつである。委員会の主要メンバーで約1年前から議論を始め、まず主なセッションテーマとして6テーマ（歴史的な分布変遷、遺伝的変異、機能構造モデル、更新特性、育林技術、温暖化の影響）を決めた。次に、それぞれのテーマについての先導的な研究者を基調講演者として選定・依頼した。さらに、できる限り他の地域のブナも含めた包括的な報告となるように、各講演者には他地域・同分野の研究者を共著者とするように依頼し、適任の共著者の紹介も行った。同時に、これらの基調講演の著者と内容をForest Ecology and Management (Elsevier 出版) の編集者に示し、基調講演を含むシンポジウムでの発表論文を同誌の特別号として出版できないか打診し、承諾を取り付けた。学術誌特別号への投稿の道が用意されているということが、基調講演や一般講演の発表者にとっての参加・発表の動機付けになり、より多くのよい講演が集まることにつなが

る。基調講演6件の発表者とタイトルは次のとおりである。

- ・Richard Bradshaw (英国：リバプール大学)：完新世におけるブナの分布変遷
- ・Giovanni G. Vendramin (イタリア：CNR)：ブナの遺伝的変異を形作っている歴史的・現在の要因
- ・梅木 清 (千葉大学)：ブナ個体の形態・生理的特性のモデル化
- ・Sven Wagner (ドイツ：ドレスデン工科大学)：ブナの更新に関する研究—生態学と林学の視点から—
- ・Sebastian Hein (ドイツ：バーデン森林研究所)：単木重視と林分重視のブナ育林技術の比較—成長、収穫、材質—
- ・Koen Kramer (オランダ：アルテラ研究所)：ヨーロッパブナの気候変動に対する反応—地理的分布と適応能力のモデル化—

息抜き

3日間の研究発表の合間に、茶席体験と函館市内へのイブニングツアーを企画した。茶席体験は、大沼セミナーハウスの和風研修棟の茶室を利用して、昼食時と午後のブレイク時に約30分のセッションを計3回行った。地元のボランティアの方たちにお茶を点ていただき、作法の解説も受けた。海外からの参加者のほぼ全員が参加し、日本文化の一端に触れることができた大変好評であった(写真-4)。研究発表2日目の夜のイブニングツアーでは、バスで函館山に上って夜景を見た後、市内のビアホールで冷えたビールと食事を楽しみ、くつろいだ時間を過ごした。



写真-2 セミナーハウスの口頭発表会場



写真-3 ポスターセッション

エクスカーション

今回のシンポジウムでは2つのエクスカーションを用意し、1日目に自生北限域のブナ林を、また5～6日目には八甲田山の森林植生と白神山地のブナ林を視察した。

1日目のエクスカーションは、とくに海外からの参加者に早い段階で日本のブナ林を見てもらい、その特徴や分布などについて具体的なイメージをもった上で2日目以降の研究発表に参加してもらえるようにするために設けた。同時に、初日の森林散策は、海外参加者の時差ぼけ解消にも役立つ。大沼での開会式の後、バスに乗って噴火湾沿いの国道を約2時間北上し黒松内町に到着。折しも2008年は同町内にある歌オブナ林の天然記念物指定80周年にあたる。これを記念するフォーラムがちょうど9月6～8日に黒松内町の実行組織と北海道森林管理局の共催で開かれており、そのイベントのひとつとして実施された交流昼食会にエクスカーション参加者全員が招待された。昼食会では、谷口徹町長の歓迎のご挨拶の後、地元の食材がふんだんに使われたご馳走を頂戴し、町の関係者や町民の方々とともに和やかなひとときを過ごさせていただいた。参加者相互にとってもよいアイスブレイカーとなったようだ。その後、人数が多いため2班に分かれ、歌オブナ林と添別のブナ二次林とを交互に訪れた。歌オブナ林では、黒松内町ブナセンターの斎藤均学芸員のガイドで約1時間半林内を歩き、日本のブナ林の分布や生態などについて解説を受けた(写真-5)。林床のササは海外からの参加者にとって初めて見るものであり、その生態やブナの更新との関係に

議論が尽きないようであった。添別ブナ二次林では、ここにタワーを建てて林冠層までの調査を行っている北海道大学苫小牧研究林のOnno Muller氏と中村誠宏氏から、ブナの生理生態や生物間相互作用の地理的な違いに関する研究の成果について解説を受けた。

5～6日目のエクスカーションでは、函館からフェリーで津軽海峡を南に渡り、八甲田山と白神山地を訪れた。国内からの参加者の大半は4日目の研究発表までの参加だったので、この青森へのエクスカーションに参加したのは海外からの37名と事務局を含む日本人9名である。12日早朝6時に大沼のホテルをバスで出発し、11時20分に青森着。すぐに八甲田方面に向かい、萱野茶屋と呼ばれる休憩所近くの草原にシートを広げてピクニックスタイルで昼食とする。フィールドワーカー達のエクスカーションは、野外での昼食でもなんら不平不満がないので、準備する方としては気が楽だ。昼食の後、再びバスに乗ってブナ帯を抜け、アオモリトドマツの生育する睡蓮沼、林内放牧と炭焼きの跡のブナ二次林、そして奥入瀬溪流の溪畔林などこの地域のさまざまな森林植生を見て回った。現地の解説については、森林総合研究所北海道支所の関剛氏に特別に作成していただいた資料と、下見の際に提供していただいた中静透氏からの情報によった。

翌13日は、シンポジウムの最終日であるが、世界自然遺産の白神山地を訪れるハイライトでもある。宿泊先の弘前市内のホテルを朝7時半に出発。西目屋村を経て、白神の山々を眺望できる津軽峠に9時過ぎに到着した。津軽峠では、環境省・西目屋自然保護官事務所の



写真-4 セミナーハウスの和風研修室での茶席体験



写真-5 歌オブナ林へのエクスカーション(右の説明者は黒松内町ブナセンターの斎藤学芸員)



写真-6 白神山地・津軽峠でのアクティブレジャー石橋氏による説明

アクティブレジャー石橋史朗氏から白神山地の世界自然遺産地域の概要、経緯、保全・管理の状況などの解説を受けた(写真-6)。参加者からは、動植物相や来訪者の実態、緩衝地域の意味などさまざまな質問があったが、最も興味が集中したのは、この地域の自然が過去・現在にどの程度人為の影響を受けているか、あるいはなぜ人為の影響がきわめて少ない状態で保たれてきたのか、という点であった。狩猟、牧畜、木材生産など生活に密着した森林利用が古くから行われてきたヨーロッパやイランからの参加者にとっては、原生的なブナ林がこれだけの規模で残っていることは確かに驚きだろう。その後、バスでさらに30分奥に入り、奥赤石遺伝資源保存林を視察した。この保存林は世界遺産地域の外ではあるが、遺産地域内と同様の原生的なブナ林が約18ha保存されている。トチノキの実が音を立てて落ちる林内の観察路を石橋氏の案内で約1時間半かけてゆっくり歩き、白神山地のブナ林を参加者に十分満喫してもらうことができた。その後、西目屋村まで戻って昼食をとった後、JR弘前駅と青森空港に参加者を送り届け、エクスカーションならびにシンポジウムの全日程を終了した。

おわりに

6日間の開催期間を通じて好天に恵まれるとともに、

参加者の方々にさまざまな面でご協力をいただき、シンポジウムを終了することができた。参加していただいた皆さんに心からお礼を申し上げる。口頭・ポスターでの多くの研究発表を通じて、日本のブナ研究のレベルの高さと層の広さ・厚さを海外の研究者にもアピールできたのではないと思う。このシンポジウムを機に、ブナに関わる幅広い分野で海外と日本の研究交流が進展し、共同研究にまでも発展することになれば素晴らしい。

シンポジウムで発表された個々の研究成果は、ブローシードイングスとしてとりまとめて今年中に発行することとしている。また、前述した Forest Ecology and Management 誌の特別号には基調講演6件を含め約30件の投稿希望があった。今後、同誌の通常の査読プロセスを経て、2009年末の発行を目標として編集を進める予定である。なお、次回のシンポジウムはヨーロッパで2010～2011年頃に開催される可能性が高い。スペイン、ドイツなどが候補地としてあがっている。

このシンポジウム開催の準備・運営にあたっては、本文中にお名前を挙げさせていただいた方々をはじめ、多くの方々にひとかたならぬご尽力・ご支援をいただいた。またIUFRO-Jからはシンポジウム開催の事務局経費を助成していただいた。この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

森林計画学会 2008 年度夏季台日合同国際シンポジウム

「多目的・長期的な森林の管理計画の樹立に向けて」の開催報告

山形大学農学部 野堀嘉裕

2007 年度 IPCC の報告によれば、化石燃料の消失に伴う地球温暖化が疑いのない事実として世界的に認識されるようになってきており、同時に生物多様性の保持が重要な課題としてクローズアップされつつあります。今や、森林管理計画にはこれまでも増して多目的かつ長期的な視座が求められています。

このような時代的背景の中、森林計画学会では 2006 年度の夏季シンポジウムにおいて台湾と日本の研究者による合同研究会を東京大学附属千葉演習林で行いました。また、2007 年夏には台湾大学と中興大学で「日本と台湾における持続的な森林経営と炭素吸収源」に関する合同シンポジウムを行いました。さらに、2008 年夏には「多目的・長期的な森林の管理計画の樹立に向けて」と題する国際シンポジウムを行うこととなりました。実行委員長は山形大学教授の高橋教夫氏、副委員長は東京大学教授の山本博一氏、また山形大学名誉教授で鶴岡市名誉市民の北村昌美氏を顧問にお願いし、事務局長は筆者が担当しました。実行委員のメンバーは、馮豊隆氏（中興大学教授）、鄭欽龍氏（台湾大學教授）、松村直人氏（三重大学教授）、龍原哲氏（東京大学准教授）、寺岡行雄氏（鹿児島大学准教授）、吉本敦氏（東北大学准教授）、伊藤太一氏（筑波大学准教授）です。

ところで、山形県の庄内地方には木材生産を目的として造成された人工林ばかりでなく、ブナ原生林や高齢人工林、そして海岸林など貴重な森林が多く存在しています。鶴岡市ではこれら豊かな森林の存在を背景として「森林文化都市」構想を提起しています。このことから、鶴岡市は本シンポジウムのテーマである「多目的・長期的な森林の管理計画の樹立に向けて」について国際的な視野で協議するうえでは実に相応しい場所であるといえます。森林計画学会では 2008 年度の夏季シンポジウムを国際的な情報発信源とするために、この豊かな森林に囲まれた鶴岡の地で開催することを企画しました。そして、東南アジア諸国をはじめ世界各国の森林研究者を対象としてシンポジウムへの参加を呼びかけることとなったのです。8 月 26 日から 29 日にかけて開催された本シンポジウムには、アジア・アフリカをはじめヨーロッパからも参加申込がありましたが、結果的にはアジアと

ヨーロッパからの参加者は合計 30 名となりました。

鶴岡市の出羽庄内国際フォーラムで 8 月 27 日午後に行われた基調講演では、はじめに東京大学教授で森林計画学会長の山本博一氏により開会の挨拶があった後、イタリアから参加されたフローレンス大学のフランセスカ・リチオリ博士により「Agriculture and forest general statistics in Tuscany Region, Italy」と題する講演が日本語への通訳を介して市民に公開されました。またこれに続き三重大学の松村直人教授により「Applicability of forest resource database for multi-purpose and long-term forest management : Potential for implementation of AR-CDM project and community-based forestry」と題する講演が日本語で行われました。夕方に行われた市民公開講演会では、はじめに鶴岡市長、山形大学農学部長からの祝辞を頂いた後、中興大学教授の馮豊隆氏により「Application of Spatial Information in Ecosystem Management and Predicting the Environmental Change」と題する講演が通訳を介して市民に公開されました。27 日は場所を変えて山形大学農学部で早朝から口頭発表 11 件、ポスターセッションが 12 件行われ、老若男女の研究者たちによる活発な討論がなされました。夕方には東京第一ホテル鶴岡で懇親会が開催されました。

28 日と 29 日は山形県の庄内地方を中心としたエクスカーションが行われました。エクスカーション最初の見学は最上川船下りによる最上峡の森林観察でしたが、ほとんどの参加者がテレビドラマ「おしん」体験に感激していたようです。その後は、羽黒山でのスギ高齢林観察、月山山麓のブナ林観察、クロマツ海岸林の観察などが行われ、森林の中で終始熱心に議論がなされていました。

29 日午後には鶴岡駅で解散となりましたが、参加者はこのシンポジウムに満足していた様子でした。

なお、本シンポジウムは IUFRO（国際森林研究機関連合）第 4 部会の国際シンポジウムの一環として台湾と日本の合同シンポジウムとして開催されたものであり、IUFRO-J をはじめ鶴岡市、また山形大学から助成を受けることができました。関係者の皆様に心から感謝いたします。

IUFRO Working Parties 4.01, 4.02, 4.04 International Conference

「Advances in Forest Management and Inventory」に参加して

森林総合研究所多摩森林科学園 井上真理子

2008年10月13～17日に、韓国 ChunCheon（春川）市の Kangwon（江原）大学にて開催された国際シンポジウムに参加しました。ソウルから90km北東、バスで約2時間ほどの郊外の Kangwon 市にある Kangwon National University にとって初の IUFRO 国際シンポジウムということもあり、大学、市を挙げて盛大に行われました。参加者は、大学生なども含めて140名以上（事前登録115名）で、日本からは森林計画学会メンバーを中心に8名が参加しました。発表予定件数は48件で、規模は大きくないものの、韓国の熱意と歓迎を感じた5日間でした。大会では、IUFRO 会長の Lee Don-Koo 氏の挨拶、韓国の山林庁長官らの歓迎の挨拶があり、4つの Keynote speech, 1) 韓国の森林資源と林業政策, 2) 世界の森林経営の傾向, 3) 成長や収穫モデル, 4) アメリカにおける国家森林資源調査についての講演がありました。研究発表は7つのテーマで行われ、気候変動と森林経営、アグロフォレストリー、持続可能な森林経営、公益的な機能、森林政策、森林資源の調査と評価、GIS とリモートセンシング、などをキーワードとした発表がなされました。特に韓国の大学院生が流暢な英語で堂々と発表している姿が印象的でした。

大会に参加して最も印象的だったのは、学問にかける熱意と大会関係者の真摯な態度です。儒教を重んじた韓国のお国柄なのでしょう、College of Forest and Environmental Sciences を挙げた盛大なもてなしと運営をして頂きました。大会の会場となった Kangwon 大学の60周年記念国際会議場は、日本では考えられないほど立派な建物で圧倒されました。Kangwon 大学は、市内に広がる丘1つが全て大学の敷地といった巨大な大学で、17の colleges, 24,000名の学生が在学し、施設も充実しているようでした。大会運営に協力してくれた

学生さん達が皆大変親切で、教授の先生方に従い、我々外国からの客人をもてなして頂き、礼節を重んじた文化を感じました。大学の先生方や学生さんの中には日本に留学されていた方も多く、言葉で困ることも全くありませんでした。

森林計画の面で見ると、韓国の森林を巡る状況は日本と似ている印象でした。林業政策は、日本に追従するように、朝鮮戦争を含む森林資源の乱伐期の後に1973年から国家を挙げた植林を行って、現在は国土の6割以上が森林となっています。しかし、まだ若い林が多いので、木材資源は外国からの輸入に頼っています。治山や植林が一段落した現在、保健休養や環境教育に関心が高まっているようで、週末には高層マンションが立ち並ぶソウルから ChunCheon 市など郊外へ向かう渋滞に遭遇しました。またフィールドトリップで訪問した国立樹木園は、旧王族の広大な敷地にあり、充実した森林・林業の展示館では小学生や中学生などでにぎわっていました。展示館内は、森林や樹木、動植物などの他に、木材種類や利用、文化面にまで及び、きれいで分かりやすく、充実した展示、解説となっていました。韓国の山林庁による運営とのことでしたが、展示、予算、規模のどの面も羨ましい限りでした。

最後に ChunCheon と言えば、「冬のソナタ」のロケ地です。大勢の日本人観光客が押し寄せたようで、街中のロケスポットにはドラマの写真と日本語解説が付いた看板が立っていました。その街中では夜12時まで大学受験用の塾の明かりが灯っていました。受験生は夜12時まで勉強するのだそうです。日本人は韓国ドラマに熱狂している場合ではない気がしました。2010年の韓国での IUFRO 大会には大勢参加して、日本人のパワーを示せればと思います。

事務局からのお知らせ

1. IUFRO-J 研究集会事務局・参加助成の募集について

平成 22 (2010) 年 3 月までに開催される IUFRO 関連研究集会に対して事務局・参加助成を行います (参加の場合は海外での集会のみです)。希望者は平成 20 (2008) 年 12 月末日までに、規定の書式にしたがい助成申請を提出してください。申請書の様式は下記のウェブサイトでダウンロードできます。

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/jyosei.htm>

2. IUFRO-J 平成 21 年度機関代表者会議のご案内

第 120 回日本森林学会大会が京都大学で 2009 年 3 月 25 日 (水)～28 日 (土) の日程で開催されます。それにあわせて表記会議を開催致しますので、機関代表者の方のご参加をお願いいたします。

日時：2008 年 3 月 27 日 (金) 昼休みを予定

場所：京都大学内 (詳細は未定)

議題：会務報告、会計決算報告、監査報告、事業計画案、予算など

IUFRO 研究集会事務局・参加助成実施要領

対象集会：IUFRO 関連研究集会 (参加の場合は、海外に限ります。)

助成金額：事務局：20 万円 / 団体、

集会参加：10 万円 / 人を目途とします。

応募資格：会費を納入している機関、会員

○会則第 5 条に則り、研究者登録をお忘れなくお願いいたします。事務局で会費納入を確認できない方は助成の対象にできません。

○研究集会参加は筆頭発表者に限ります。

募 集：随時受け付けています。

規定の申請書に必要事項を記入し、必要資料を添付して、下記まで送付。

〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1 番地

森林総合研究所内

IUFRO-J 事務局宛

選 考：12 月末現在で集計し、集計時から 1 年 3 ヶ月後までに開催される研究集会を選考対象として選考委員会に諮ります。

選考結果：IUFRO-J News で発表。

配布時期：原則として集会開催 1 ヶ月前。

(国際集会の場合、キャンセルになる場合もありますので、できるだけ直前とします。)

備 考：助成を受けた機関・会員には IUFRO-J News への投稿を求めます。

注 意：助成金額はあくまで目途です。

IUFRO-J 一般会計の収支状態によって、事務局で勘案いたします。

附 則：

(平成 9 年 4 月施行通知、初出 IUFRO-J News No.61)

(平成 9 年 7 月 10 日 IUFRO-J News No.61 掲載一部改訂)

(平成 13 年 8 月 IUFRO-J News No.73 掲載一部改訂)

IUFRO-J News No. 95 平成 20 年 11 月 17 日

国際森林研究機関連合 - 日本委員会事務局

〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1

森林総合研究所 国際連携推進拠点

TEL 029-829-8327, 8328

iufro-j@ffpri.affrc.go.jp

[編集・発行]